

2008 年度『寒冷地在宅患者への生活影響調査』の報告

全日本民主医療機関連合会／国民運動部

全日本民医連では、昨年に引き続き、寒冷地での生活の困窮を懸念し、高齢や独居の在宅患者の実態を把握するため、生活影響調査を行ったので報告する。

■調査目的

- ①寒冷地での暖房費節約等による生活と健康への影響を調査し実態を把握する。
- ②気になる方への対策と対応、アドバイス等を行い、困難事例を把握して必要な場合は保健所や地域包括支援センターにも報告しともに対応する。
- ③寒冷地対策の必要性を行政・世論に提起していく。

■調査対象

- *在宅患者で65歳以上の老人独居・老夫婦世帯の方。あるいは、それ以外の気になる患者。
- *北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、新潟、富山、石川、福井、山梨、長野の13県連に調査を依頼。

■調査方法

看護師・ケアマネジャーなどの患者訪問の機会を利用した、アンケート（別紙）による聴き取り調査、健康チェック、居室の温度測定など。

■調査期間

2009年1月5日～1月30日までの約4週間を基本として調査した。

調査結果の概要

*注) 調査項目は未記入・不明もあり、総数とは一致しない。

1. 集約数:13県連から479世帯

*昨年の調査報告は、12県連・321世帯でした。
(北海道136、青森32、岩手30、宮城29、秋田17、山形30、福島28、新潟27、富山24、石川30、福井56、山梨7、長野33)

2. 性別: 男性159人 女性275人 不明45人

3. 年代別:

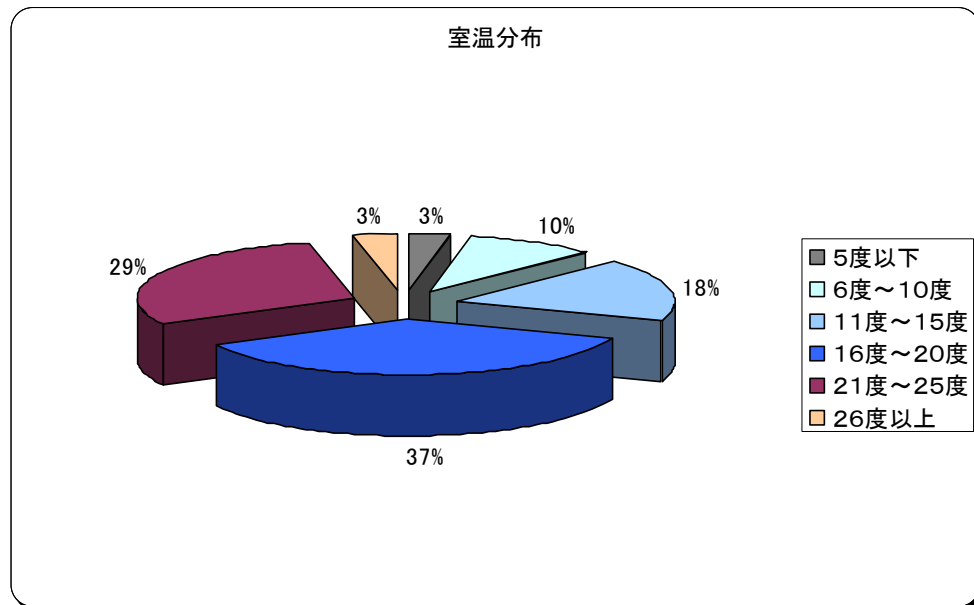
90代以上	29人(6%)
80代	109人(22.8%)
70代	109人(22.8%)
60代	32人(6.7%)
50代	4人(0.8%)
40代	2人(0.4%)
不明(回答無し)	194人(40.5%)

*調査対象者の平均年齢は78歳。最年少は41歳、最高齢は107歳。65歳以下は10人でした。

4. 世帯状況:

独居222世帯(46.4%)、老夫婦のみ107世帯(22.3%)、その他(不明含む)150世帯(31.3%)

5. 室温:10℃以下が13%、15℃以下は31%、およそ7割の世帯が20℃以下



グラフ1

①昨年、灯油価格の高騰という事態を受けて緊急に行った調査では、10℃以下は11%、15℃以下は28%でした。今年は、昨年に比較すれば灯油価格も3分の2程度に落ち着き、雪も少なく、客観的条件は好転していますが、寒冷地での生活実態はむしろ深刻になっている事が浮き彫りになりました。

「来客時のみ暖房をつける」という回答が23世帯であり、特に看護師や介護職が訪問する時には「部屋を暖めて待っていてくれる(事例181など)」という例が多いため、実際にはこの結果よりもっと寒い生活を送られていることが推察出来ます。

②特に15℃以下で生活されている世帯は、外気温と室内温との差が5.3℃しかなく、ほとんど外気温と同じような環境での生活を余儀なくされている事がわかりました。また、86%が70歳以上の方のお宅でした(母集団に占める70歳以上の割合は52%)。ちなみに、室内温15℃以上の世帯では外気温との差は12℃以上ありました。

15℃以下の世帯では、室内温が外気温よりも低いという世帯が16世帯、同じという世帯が6世帯もありました。「すきま風の吹く部屋で生活されている(事例283など)」という世帯も10世帯以上ありました。県別で調べてみると、北海道の室内温度の平均が21.2℃で外気温との差は22.2℃ありましたが、福島・長野では平均室温も15℃以下で、外気温との差はそれぞれ5.8℃、2.6℃しかありませんでした。古い農家が多く、寒冷地仕様の住宅が少ない中で生活されている地域の問題も浮き彫りとなりました。

③「寝たきりの夫が居るので暖房費は削れない(事例476など)」など、生活がどんなに厳しくても室温だけは一定に保つための努力をされているご家庭も少なくありません。「室温が20℃あるので生活は楽」とは言えない事もあわせて認識する必要があります。

***** 事例紹介 No. 138 *****

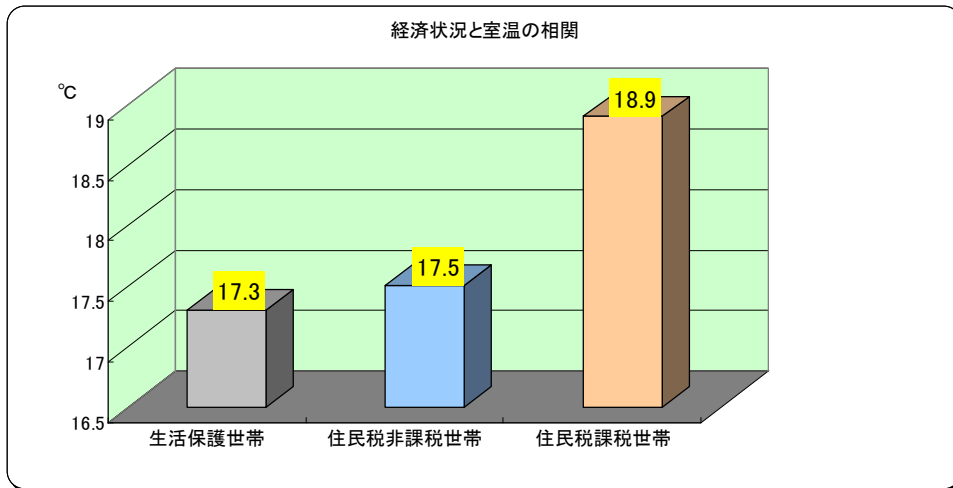
青森県 72歳女性 独居 気温4℃ 室温0℃ 住民税非課税世帯

暖房をつけている時間、場所を減らしている。電気コタツに入り、灯油がもったいないので、ストーブはつけないようにしている。朝はなるべく起きないで少し日が昇ってから起きる。寝るときは靴下をはいている。上着5枚、下も5枚着ているため動きにくい。

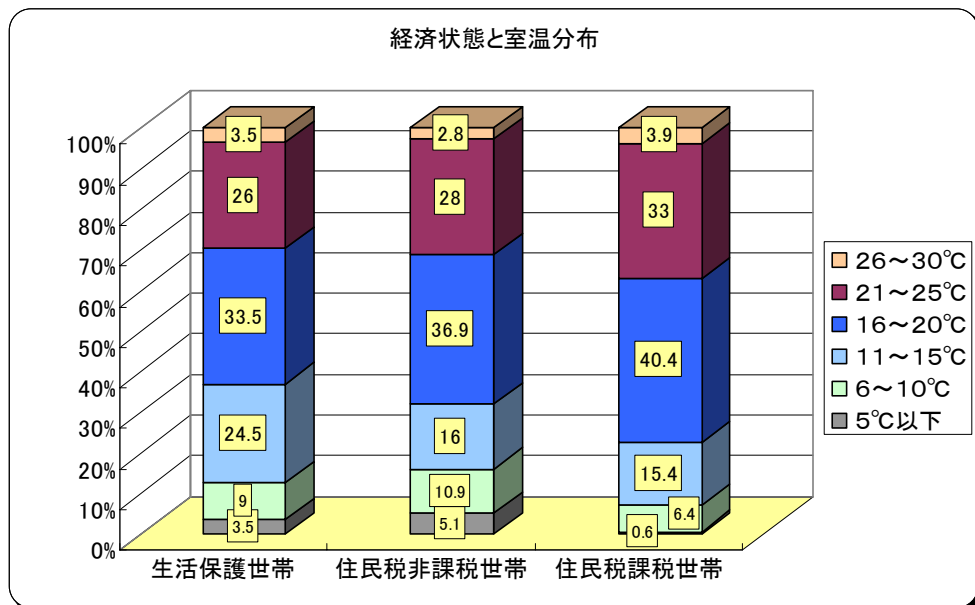
血圧178/88と高く、「特に寒い日は血圧が上がる」と、ご本人も話されています。厚着しているため、動きがとれず、よく転倒している様です。ただでさえ厳しい高齢独居のお宅での暮らしの不安が、寒冷期には体調不安と怪我に直結する形で現れています。

冷蔵庫の標準設定温度が3.5℃、弱だと4.7℃、強にしても1.9℃と言われていますから、室温0℃という住環境のすさまじさは想像を絶するものがあります。部屋の中で「息が白くなる」という報告も多数あります。

6. 経済状態との相関:室温にも依然「経済格差」が・・・。



グラフ2



グラフ3

室温にも経済格差が現れたことは、昨年調査でも驚きでしたが、今回もほぼ同様の結果が得られました。住民税課税世帯と生活保護世帯の室温の差は平均1.6℃。

1.5℃以下の世帯割合で見ると、住民税課税世帯では22.4%、生活保護世帯では37%と、大きな差が見られました。

***** **事例紹介 No. 200** *****

宮城県 女性 老夫婦世帯 気温8℃ 室温1.5℃ 生活保護世帯

夫の体調なども関係あるので、暖房費の節約はどうしてもできない。そうすると食費など他の面で削るしかない。米を安く買う、外で食べられる野草を摘んで、調理して食べるなど、しているとのことです。昨年は暖房を節約していたために転倒して恥骨骨折してしまつた経験もあり、部屋があまり寒くならないように気をつけていらっしゃいます。

寒冷地では、暖房は命綱であり、削れない支出となっていて、食費を切りつめざるをえない事態となっています。1.5℃という室温は決して高い温度ではありませんが、訪問してみると、それ以上に深刻な生活実態が垣間見えてきます。

7. 節約状況：暖房費節約による身体機能低下への影響が懸念されます。

- ① 暖房をつける時間・場所を減らしている 33.4%
- ② 暖房の温度を低く設定している 15.3%
- ③ 特に何もしていない 51.3%

しかし、③と回答した世帯の中で、本当に「何もしていない」のは8.3%のみ、圧倒的多数が何らかの節約・工夫をしていました。

その中でも特に多いのが、厚着でした。「上着を3枚重ね着。更に首にはマフラー」「上は6枚、下は下着1枚とズボン3枚をはいている」「室内でもジャンパーを着て、足先が冷えるので靴下を4枚履いている」など、外出時とほぼ同様の防寒着で家の中で過ごされている様子が判ります。

同様に、コタツや布団の中で、あるいは電気毛布にくるまって日中もジッと寒さに耐えていらっしゃる方がたくさんいらっしゃることも判りました。

***** **事例紹介 No. 171** *****

岩手県 80歳女性 日中独居 気温4℃ 室温6℃ 住民税課税世帯

日中独居の方で、部屋はいつも寒々としている。布団から出ることがなく、身体機能が低下し、寝たきり状態になってしまった。環境の影響があると思われる。

その他にも、こんな報告が届いています。「足・かかとに冷感。チアノーゼがみられる」「一日こたつにもぐって過ごしているため、下肢筋力低下あり」「トイレに行く時以外は、布団に寝ている。トイレに立つ時転倒したことあり」など、節約して寒さを耐えているために、身体機能が低下している方たちがたくさんいらっしゃいます。

8. その他の事例：

①事例No. 4 北海道 80歳 女性 独居

気温マイナス7℃ 室温12℃ 住民税課税世帯

一歩足を部屋に踏み入ると室内が非常に冷えており、利用者様も服を何枚も重ねて着ており、コタツへまねかれた。コタツの外に出ていた座布団をいただくと湿気を含んでいるせいかひんやりと冷たく、テレビを消し、ラジオに耳を傾けていた。「こうやって節約しているんだよ、寒くてごめんね」と気を遣われている。“デイサービスに行くと暖かい。デイサービスにいるときだけ人間になる”と笑って話されており、血圧も利用時は150台の100台であり寒いね…とたたずまれ、決して良い環境といえる状態ではなかった。朝起きるとペットボトルの水も凍っていたとのこと。

②事例No. 137 青森県 独居 女性 82歳

気温マイナス2℃ 室温マイナス1℃ 生活保護世帯

暖房をつけている時間、場所を減らしている。帽子をかぶり、布団にもぐっている。ストーブは夕方少しの間だけつける。体調も優れない。頭痛やだるさがある。部屋が散らかっているため年末、転倒し下肢の指骨折。寒いので体の動きも悪い。窓の隙間から風がヒューと入ってくる。

前より生保のお金が減っているので、前に戻して欲しい。(老齢加算のことらしい)

③事例No. 199 宮城県 59歳 男性 68歳の妻と二人暮らし

気温7℃ 室温10℃ 住民税課税世帯

介護で動けなくなって、経済的にも苦しいので、昨年灯油の補助を区役所にお問い合わせに行ったら、「一昨年少しでも税金納めた人はダメだ」と断られた。食費を削ってでも皆さんの迷惑にならないように一生懸命やりくりしている。障害で働けず、急に収入が減ったり昨年と違う苦しい状況なのに実態に沿って補助してほしい。区役所では、あげくの果てに「お金貸せますよ」と言われた。借金で迷惑をかけないように頑張っているのに、そういうことを言われて非常に頭にきた。

④事例No. 233 秋田県 88歳 女性 独居

気温7℃ 室温18℃ 住民税非課税世帯

灯油価格高騰のため、室温を低めにしコタツを利用している。灯油価格の変動もあり、暖房はガスストーブのみとした。住まいは、築35年以上経過しており、各部屋はふすまのため、外気が入りやすい(暖房しても20℃以上にはならない)。室温を低くすることで衣類を多く着込み、動作が緩慢になり転倒の危険性が高くなっている。

⑤事例No. 283 福島県 男性 老夫婦世帯

気温6℃ 室温10℃ 住民税非課税世帯

少しでも暖かくなると暖房を消している。古い農家の作りで断熱材もないので、すきま風もあり、たくさん厚着をされている。

⑥事例No. 308 新潟県 81歳 女性 独居

気温8℃ 室温15℃ 生活保護世帯

本人は電気コタツに入って過ごしている。台所に立つ時はコンロの火をつけるからと特に暖房はない。電気ストーブはあるが、来客時に使用するのみ。

⑥事例No. 330 富山県 老夫婦世帯

気温7℃ 室温8℃

室内にいても外と同じような気温だった。暖房をつけている時間、場所を減らしている。居間はこたつのみ、台所はヘルパーのために電気ストーブがおいてある。ファンヒーターは座敷用でお客様用に決めているため、自分たちでは使用されない。

⑦事例No. 355 石川県 71歳 女性 独居

気温7℃ 室温10℃

ファンヒーターはあるが、灯油、電気がかかるのでつけておらず、コタツの中にもぐっている。コタツの設定も1か2。本人は「風邪気味だ」と鼻水をたらしている。

⑧事例No. 385 福井県 76歳女性 孫二人と同居

気温15℃ 室温6℃ 生活保護世帯

全く暖房は使用していません、今日は暖かい日だったが、寒い日はとても寒い部屋にいる。理由はその方が体調がいいからとの事。しかし、心疾患があるので出来れば暖かい部屋にいて欲しい。

生保世帯、諸事情により、孫2人と同居しているが（孫も生保受給）孫がアルバイトなどで、少しでも収入があると、生保を減額される（働き先に調べにくる）貧困の世代間連鎖を実感する。もう少し暖かい対応があってもよいと思う。

10. まとめ

1) 昨年の問題意識は「灯油代の高騰によって、寒冷地在宅患者さんへの悪影響があるのではないか」というものでしたが、昨年に引き続く今回の調査では、「灯油の価格だけではなく、生活全般がひどく落ち込んでしまっており、寒冷期に使わざるを得ない暖房費支出により、そのことがより浮き彫りになっている様子」が明らかとなりました。

原油価格が少し落ち着いたとはいえ、灯油の価格はガソリンほどは下がっておらず、寒冷地の生活実態はたいへん深刻です。

2) 高齢世帯での深刻さは際立っていると考えます。医療費や介護費用に加えて、新たに後期高齢者医療保険料が引かれるなど「ただでさえ低い年金、増えることのない年金から、引かれるものだけが増えていく」事への不安と不満が多く出されています。これ以上、何を切りつめて生活していけば良いのか、人間らしい生活とは何かが問われています。

3) 生活保護世帯へのより強い影響も浮き彫りになりました。聴き取りを通じて「高齢加算が廃止されて2～3万円も保護費が減らされてしまった」ことで、この世帯の深刻さに拍車がかかっていることも伺えます。あわせて、低い住宅扶助費により、「すきま風の吹く部屋で暮らしている」など、やはり“憲法が保障する生活”とは言えない実態が見えています。

4) 障害を抱えた方の世帯も深刻です。働けなくなったり、介護を必要とする家族が生まれたときにこそ、社会保障の真価が問われると考えます。

11. 要望

- ①国は、寒冷地を中心とした世帯への調査を行い、生活困窮者をはじめとした方たちの実態をただちに把握すべきです。
- ②「福祉灯油」などの暖房費助成事業は、生活保護世帯・住民税非課税世帯にはもれなく支給される事が必要です。自治体任せにするのではなく、国の責任に於いて、執行すべきです。また、多くが一冬5千円程度となっていますが、この金額では一ヶ月相当分としかありません。実態に応じた手当金額の引き上げを行うべきです。「介護予防」や「メタボ対策」にかかる費用があるなら、寒冷期に誰もが暖かく過ごせる施策を講じることの方が理にかなっていると考えます。
- ③消費税増税に対する不安の声が多く聞かれました。既述してきたような方たちにも容赦なく増税を行うことがいかに非道なことかを知るべきです。今回の調査の中でも聞かれたように「介護費用には消費税をかけない」など、むしろ緊急の減税措置こそ実行すべきです。
- ④生活の困難な中で「定額給付金を早く出して欲しい」という声もありましたが、同時に「社会保障や雇用創出など、もっと別の所に使って欲しい」という声がそれ以上にありました。生活の底支えとなるセーフティ・ネットこそが今、切実に求められています。社会保障費削減の政策から、一日も早く方向転換をして、社会保障拡充の道に向かうことを強く要望します。

以 上